

○九月廿八日 陸天 貞次郎善助友ありて呼ぶゆくと申極小鉄描一房

儒者六十囊其お本船の物出おまてて主人のおお妙の救の漁舟乃

船頭ありて主人首枷分譲とてて終日携問てお友人書曰現在之品

物係自賣乎否 答 曰欲賣不能唯宜任君計又お曰至大蕪州變價給銀あり

厚く礼とてて謝り又曰日本米三斗價多少 答 二貫文又曰鉄描價多

少 答 六拾貫文お神紙札とて日本の五合神とてお漢の書紙お友人自収

一冊お振其内お押おとてお七何分廟おつりぬ 陸天 例の

陳と列立ててお孫屋の二階の八疊鋪許ありてお白塗の壁とて蘭羽の

像と掛けありてお春朗と書ありて額ありてお茶出とてお

言至凡五十許ありてお女子とて二十歳許ありてお硯出とてお

西親乎 答 曰有又曰在妻子乎 答 曰有又曰南方有浙江每年客商往來日本

雖遠海相隔莫用憂今年全可得回本國也と洋錢一元紙 阿菊院淺のり 七女印あり



九月十八日 臨天 貞次郎善助友所より書きて云く中務不鉄描一房  
儒者六十囊其お本船の物に物取まきて主人のあふ妙き救の漁舟乃

船取ありき人首枷取金銀といひて終日拷問をせし友人書曰現在之品  
物係自賣乎否 答 曰欲賣不能唯宜任君計又少曰至大蕪州變價給銀あり

厚く礼をうて謝り又曰日本米三斗價多少 答 二貫文又曰鉄描價多  
少 答 六拾貫文相秤成札に日本の五合秤より量深の書紙に友人自収く

一冊成極其固小押ありき七何分扇小ありぬ 臨天 九月十九日 例の  
陳と列立て孫屋の二階の八疊鋪許ありぬ白塗の壁に蘭麝の

像と掛けあり香瓜焚き又春朗と書る額あり杉白茶取して飲む  
言至凡五十許あり女子一人して二十歳許れんと視成歩 問曰係是在

西親乎 答 曰有又曰在妻子乎 答 曰有又曰南方有浙江每年客商往來日本  
雖遠海相隔莫用憂今年全可得回本國也と洋紙一元紙 阿蘭陀銭のさしり

未して贈りし七何分厚紙して廟不歸りぬ又瓊瑤廟にお儒者ありて紙  
瓜抄ありて贈り國近扶桑出日邊屏藩華夏已千年海天阻絶幾無路聖世

遭逢自有縁言語難通憑筆墨衣裳最古帶雲煙莫愁流落遲歸島帝德宏慈  
必予旋 初暗日本國 貞次郎七律 聖賢論語教中原化被東邦尚書存七道三畿人共學五

常四德衆宜敦不徒莊誦通文藝全在躬行率子孫翼戴天朝安土俗萬年莫  
負大清恩 結句恭集 御製詩 貞次郎行進出論語集註一本 玉山 十月朔日

晴天 廟の極小大書して聖誕生日と張りぬ近つては赤塔乃男女夥る縁身  
二把紅蠟燭二本宛と持来り又廟内小寶藏といふあり白壁ありて方一河

川の夫小紙錢として金紙として切りしる錢を此處まで焼捨めり三日の間に火不消  
又日奉人忍物の人夥るありて油をあげりる豆粒取多く贈りし 十月

二日 晴天 袁號といふ富家より清立の贈物と施りし 几堂斗 五律詩  
瓜い錢拾子文 日本の拾 瓊瑤廟の柱女頭して曰萍州袁號以米十袁子

錢十千文呈日本之衆位惟助客中之費耳お不存 幾堂斗 して厚く謝りぬ



濡米布賣



雷轟噬盃

左右各少官

本廳

秀才

兵

滿米布票

救之船主

石屏

内、錢拾子文  
日本の拾  
 瓊瑶廟の如粒女跡して曰洋州袁蹄以米十袁子  
 錢十千文呈日本之衆位惟助客中之費耳有不稱行して厚く謝如

秀才

先王以明罰勅法



十月三日 晴天 未明不役人馬日て書曰今日你們發足送通州有陸路八十

里 日本路十 倉車瓜ふさう一何ふ友取に列ゆさ玄蘭の左たふ列せしめ

友人書曰你們送到江蘇省每人錢一掛 ハる又ハ 衣裳一介贈 本棉の綿入

謝大恩と書さり 扱欠取序ハ青銅のふりて衣裳ハ沙詰ふ 其の日

友取り書曰衆人蓋蒲有否 答 他不足我獨足といひ 何ふやとむいさる

一人の役人を呼出友長たふと一人 と何て 五間許引下け裾試測して

日行りて舟の三十枚許り 何何 かくては妙やと尋る 何れ

一人の猶布として作り さし 瓜遠背せ 何れ なる さし

了 さし 登園及 さし 馬馬騎 さし 馬馬 さし 一回ふ厚衫 さし て さし

瓊瑤廟 さし 獨り さし 大輦拾三乘 さし 小輦十五乘 さし の さし 立 さし

有人行 さし 載 さし 市中瓜 さし 許 さし 村 さし 知 さし の さし 考 さし

其 さし の さし 人 さし 進 さし 菓子 さし 於 さし 瓜 さし 携 さし へ さし して さし 暇 さし 時 さし 付 さし 間 さし 不 さし 思 さし 然 さし の さし 縁 さし 有

て さし 一 さし 歩 さし 名 さし 瓜 さし 中 さし 一 さし 渡 さし 瓜 さし 中 さし 一 さし 車 さし 瓜 さし 駐 さし 一 さし 軒 さし の さし 茶 さし 坊 さし 又 さし 一 さし 歩 さし 者 さし

出 さし 畫 さし 版 さし と さし 一 さし 歩 さし 途 さし 一 さし 歩 さし 處 さし 一 さし

出 さし 畫 さし 版 さし と さし 一 さし 歩 さし 途 さし 一 さし 歩 さし 處 さし 一 さし

市中

紫葛橋



此邊搥茶坊



市中

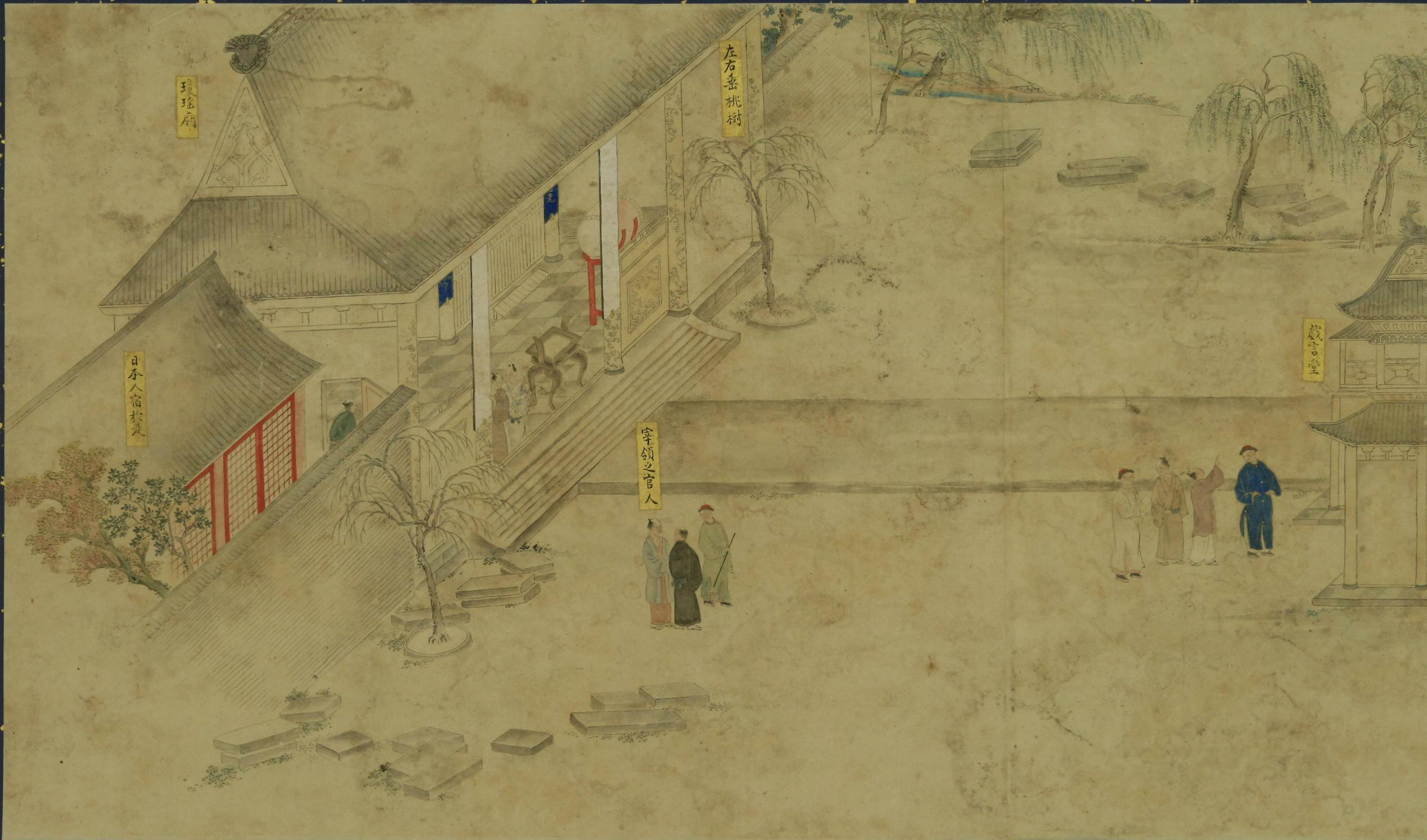
紫萬橋

此邊搥茶坊

社人

社人

予り二村過く宿村にしり車馬駐り一軒の茶坊にいりしり酒者  
出り晝飯とてしりし途にしり處る



王孫廟

日本人宿於此

左右垂桃樹

宰領之官人

此處古台

前之瓊瑤廟在於爰

農家





農家

農家



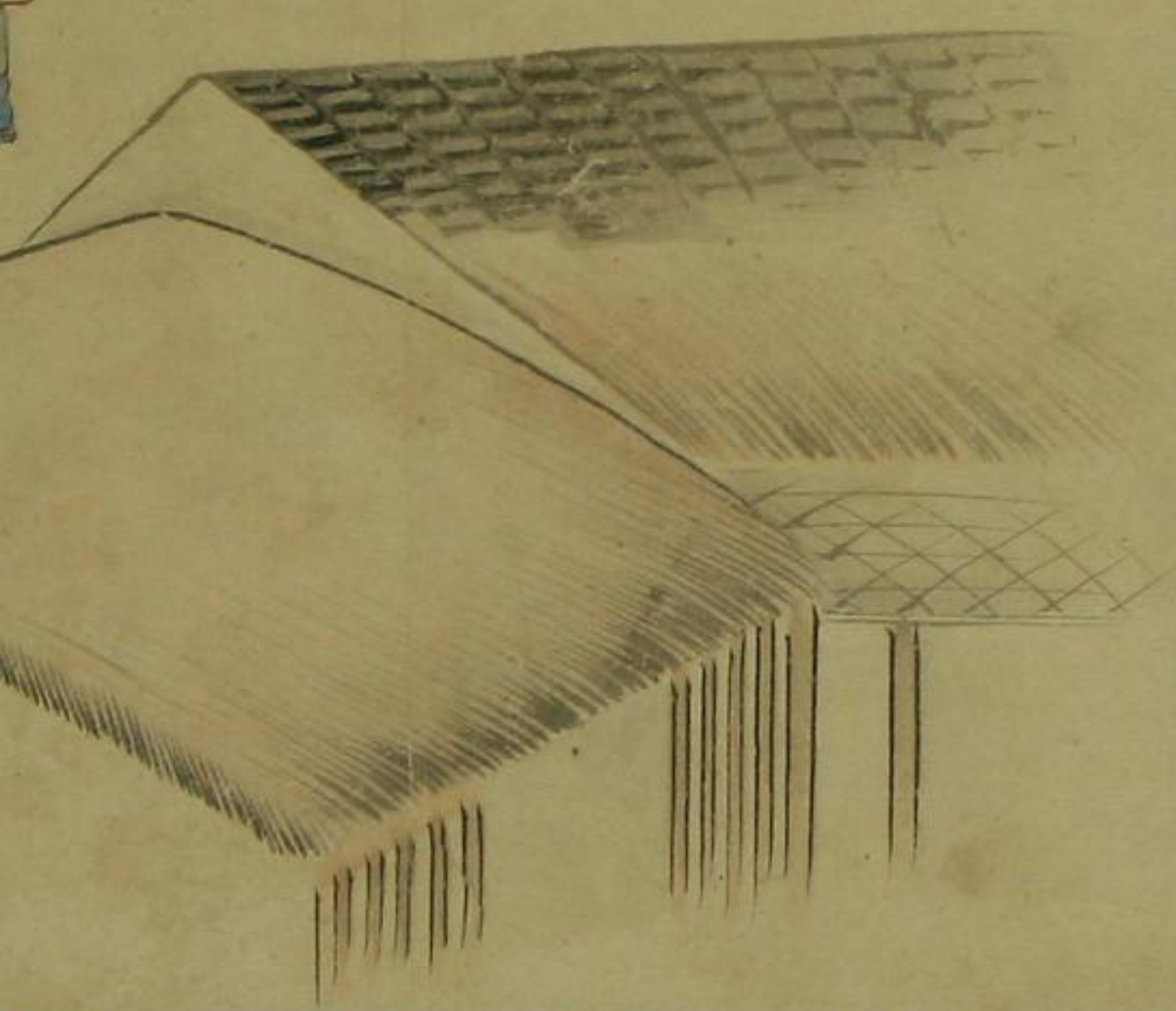
農家



寺あり豊前又田舎のりりり石門の塚あり是故乃々婦人殉死の墓  
ありとこいふ又ありとい漁舟ありと徘徊と又少く板橋のよき女五人男一人  
を以てして流る是唐土の婦人の足少は少く自由ありとて思ふもよく夜は  
通州へ入り市中の内へ到る小橋あり日本へ入り人々多くて人々多くて  
無事ありあはし許してはく大なる古城の石門の町とてありあはしく事  
四五間ありとて勝會と書とて額ありて玉橋新成連ね店は瑞瑞院と  
とりて分明なる書のため五何分り又大なる城門あり入口の幅二間許  
ありとて大なり内は十間許の穴あり入り入り扉は鉄ありて三重ありあり  
形何れも重なり形白段人あり我々此の所ありの段人母信して街五十丁許  
ゆきありと紫英朝と書とて大門あり西面は二丈許の彌陀の尊とあり  
大鐘を教と書とて掛あり夜は又小なる飯を食ふ計は豚肉四六根漬あり  
例の尾垂乃堂ありて寤ありて佛壇ありとて休息あり

取泉灌於田





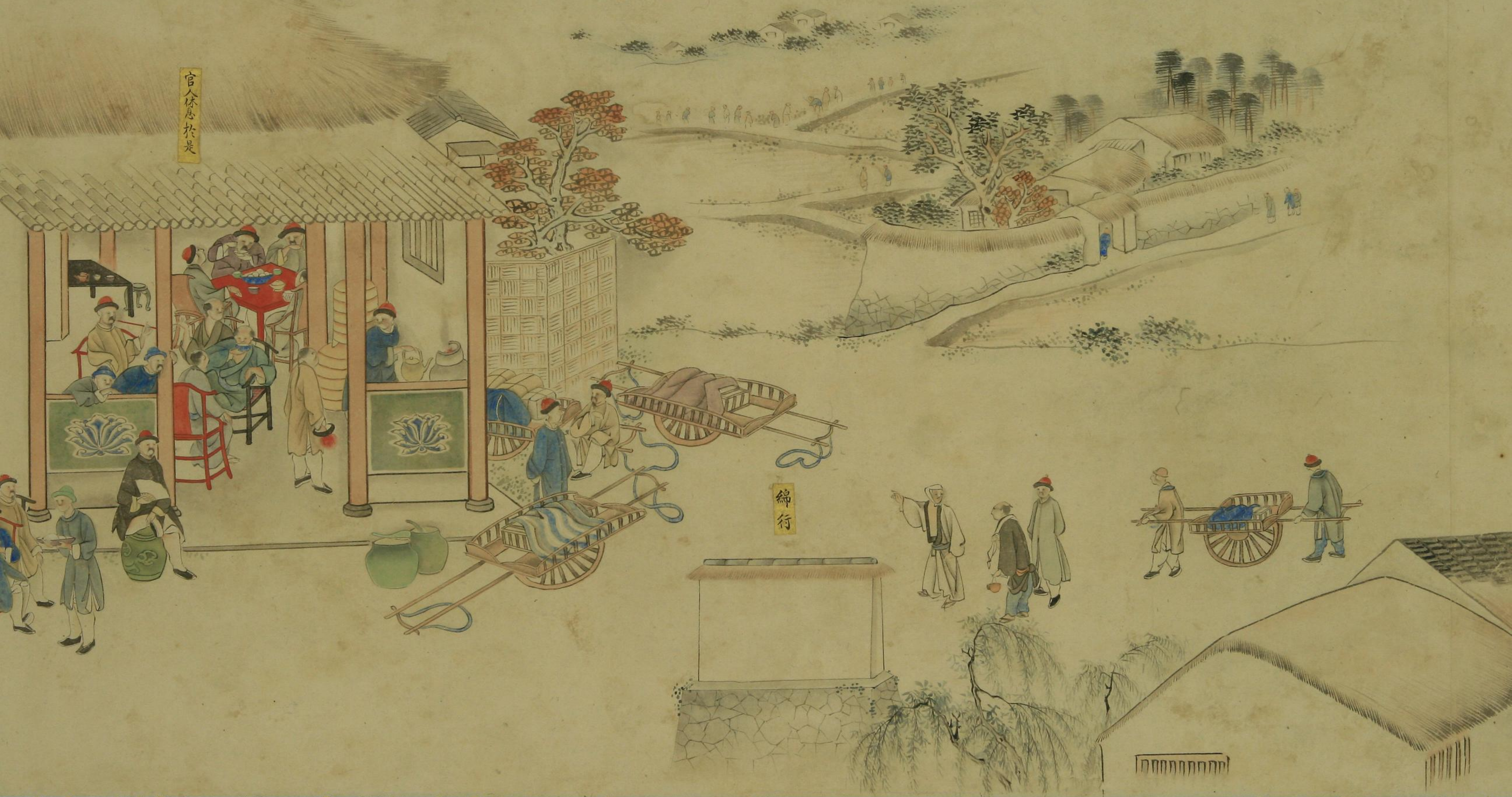
貞女殉死之墓

取泉灌於田

水白

大鐘を教へ其脇に掛多し夜之更小舟を飯を舟舟の汁ハ豚肉四ハ大根漬あり  
例の尾亭乃堂少く寝ありく佛壇よりとて休息す

官人休息於是



綿行

oooooooooooo

官人休息於是



秋輝



昨日喜風あくる梓主陸よりして船瓜のく 我邦瓜の 本舟入る進風と

ありて疾く走る四時分如阜驛へ是ぬ形瓜瓜人我くをわくへて街五丁許

けりしき城門瓜二月入りて賑ひの市中を通り一軒の家内へ到り四方都る

去蔵あり其中再列しき味瓜作と其小形瓜形瓜瓜瓜年白体瓜瓜

○十月五日 晴天 書曰此地去到泰州水路一百六十五里形瓜食瓜瓜瓜

の年白友瓜と共瓜友瓜へ到り友名按察自出て對面一書曰勿愁送到回

本國每人錢二百文贈と皆一回く相移して城門瓜出又本の棹船瓜瓜瓜

人五人けり添く西へ向て船瓜瓜瓜本八時分泰州へ到り焼灯瓜瓜

り一瓜人三人有り葉瓜一して街の二階小列しき瓜瓜のくせく餐瓜瓜

○十月六日 陰天 瓜人書曰送到揚州水路一百五十里 日本里數 此瓜凡き

丁方の屋舗より四方都る去蔵家へして鴉瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

九時分瓜人瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

飾瓜瓜一竹の柱瓜八も立上へ緋紗綾瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

瑠璃焼瓜瓜瓜掛瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

瓜瓜して音楽瓜瓜始瓜異瓜の瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜瓜

通州

農家

鴨舟

送樓船摠五艘

材木屋

一向く乃く川造り小松楊柳或は我邦の黒木種ありの多く又楓も  
 本邦より高き四尺許の枝多き梧桐も似たりあり賀芝といふ所  
 船瓜といふ此所尾城多焼出たり乃くて野菰積上如新は皆葉あり  
 焼釜は我邦と同形 杉白一人漁り鯉魚とと接し舟りてふは日風不順  
 なく衣ぬて船をりぬ







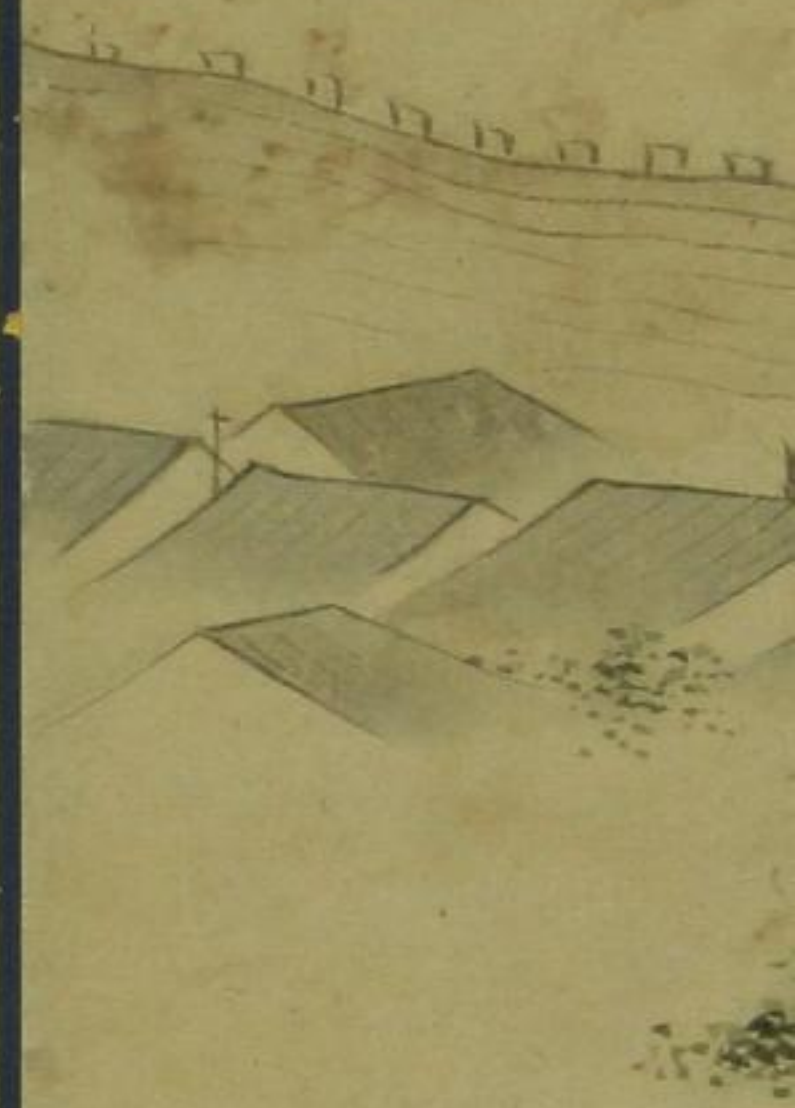
通州城西門

混堂

城外街



此地多出紬又不知何名





十月九日 陰天

五時分揚州舟を志し河川幅二丁許ありて高船楼  
 船を以て他へ移して一入蘇華の地を以て城郭ハ川涯舟連り  
 ありて又許とも又人多くあはれし一何事やらんとおしり  
 首枷入り者救捨人有りぬ貞治所書曰請問首枷者如何唐人寫曰  
 是罪人也重者下獄輕者如是日本如何問教 答曰日本之有罪者總有牢屋  
 之内不能自縱恣極揚州ハ城郭 丁仙芝詩云府城林間  
揚子驛山出潤州城是也 八拾里 日本里數  
三拾里  
 連り有り由り 我问曰揚州之官長在幾人乎唐人曰

- 一天朝皇帝文官 一四宰相 紅玉 一六尚書 兵吏刑工戸礼 一九卿 紅玉
- 一翰林 一總督 紅玉 一撫院 紅玉 一孝院 水晶 一主考 一佈政 一按察
- 一巡道 一知府 一知縣

武官

- 一九門提督 一提督 將軍提督 一總兵四 一副總 一參將 一由吉
- 一守備 一千總 一把總 一外位 一秀才

頂玉分紅玉水晶玉金玉銅玉珊瑚玉有異同而同紅玉貴賤有差別る也  
 諸陸部一需見物一但一人老翁杖負以り持て見物一列ゆく  
 この意ありて序善助を以り共舟揚州なる頓ち婦人海を以りて  
 答を以りては是れ乃ち不答妓女有り書曰向妓價多少の老人手紙を  
 洋銀を両 日本の銀七枚 といひ有り手と問ふ無と答を物とけり不彼の妓  
 多く集りて言活の不通ありて色く翻弄する海有り舟入りあり人  
 有り人救改改して城下の山路有りぼむりり百里許ありて大橋  
 通り城門あり不封門を書き額あり又一丁許改るち門あり皆鉄あり  
 廓城有り向山の方ありて繁華あり街あり人右の方横山路不入豪家の  
 裏通十丁越りて市中ありて左右の店屋燈籠掛あり人其後  
 甚多一又三丁許ありて大なる有入り入不城あり五人燈籠と持来りて  
 人救改改め有瓜瓜とて店ありぬ松を買むる家の燈籠掛あり  
 の西の方百里越りて此も有り又大なる川ありあり不人丸燈籠五張  
 川渡不掛舟ありて揚州三艘不命ありありて合事して夜半  
 過り船改改りぬ

揚州



此邊搥農家

人教改改の古所瓜出く店は、ゆ松を買むまの後の露園瓜印一帯中  
 の西乃方半里程と此老なるく又大なる川へ出るふ友人と丸焼灯を張瓜  
 川渡不掛の店へ掛船三艘小舟りきりくむきさしと合事して夜半  
 過く船瓜出くぬ



○十月十日 陰天 大河果到幅凡二里路 日本の里教也 とい婦川霧渾く向く

小島いりり又法維少江帳餘多躍り四左右茶坊りて人家  
縹々四珍遊りも頓言吳松の舟船三艘ももも我船瓜彼船の大脇ふ

くく付て走きし如く水は流し船連路多この道母あり次舟小島逃く  
あつらひの廻り星里許りて真々凡五丁許り朱塗の橋岡立連り

嶽はひつりの塔あり又巖壁とく赤松或ハ楠のふも生茂せり流り  
山門ありて額金地又紺字とんせ道也十間路過りた又文字はかきと

是孤舟々々所渭揚子江の金山寺あり寔又純暖りて画もくり如く  
此島の左脇瓜道里又星里許りて向の地母到てひつりの小川篇々入

大より橋の下り船瓜繁如又東の亦小塔郭りも問曰此地何名又自揚  
州行程有幾許唐人答曰此地鎮江縣本揚州五拾里 日本里教 六里路 此亦陶家多

るなる陸路して尺物一軒の店屋も到りて價瓜さくに錦糸の  
奈良茶碗碗十瓜二万五千錢と名振るるもも路價瓜さく又下直り

事我邦又十倍せり都南南京の深行あり又亭主一椀乃瓜出せり  
入唐の身初るく水極の美酒瓜飲り善助其なへも皆令らるるあり

頓言瓜人哉と問ひ主人五六人瓜従へ船よりのりて人数瓜改め七何令り  
船瓜出せり瓜人書曰此地本到丹陽縣水路九十里○十月十日 雨天 晝夜

追風に走りて朝四時分小丹陽縣の一村籠りてり重れ亦又船瓜さくり  
瓜人と列々茶坊も到りてに麦條のゆりて揚もるるをりしむ是と

命ふり茶の餅りしてはありあり食ひははるる地不抛捨り又  
瓜人何りも甚しきももも毎に到りて瓜人十人許りて構ま

我瓜引渡り米粟茶を買入る何令り漸く船瓜出り如く川渾少は大船  
數十艘瓜造りては初本路多ありり 初本路多ありり 本路のありり 問曰此本到何地

南



金山寺

送船四艘

倭人可なり甚しき色なり舟に引連るる倭人十人泊りて構え  
 鐵以引渡し米燈菜を買入る河合の船に引連るる大船  
 數十艘瓜造之とて初本路多あり  
初本路の  
本路の 問曰此本到何地  
 倭人書曰到常州水路九十里○十月十一日  
晴天 常州に入里城乃後の寔  
 多所へ船瓜造け暫何ありて左及五人ありて人数瓜受とるは  
 能江の倭人母多きとてくふは姫多る唐人也例法合物瓜買の八  
 多ふ船を出せり川涯右左石垣ありて皆礼枕ありて蘆原く漁者あり  
 都陸の倭人家ゆきにくては好き風景あり

南

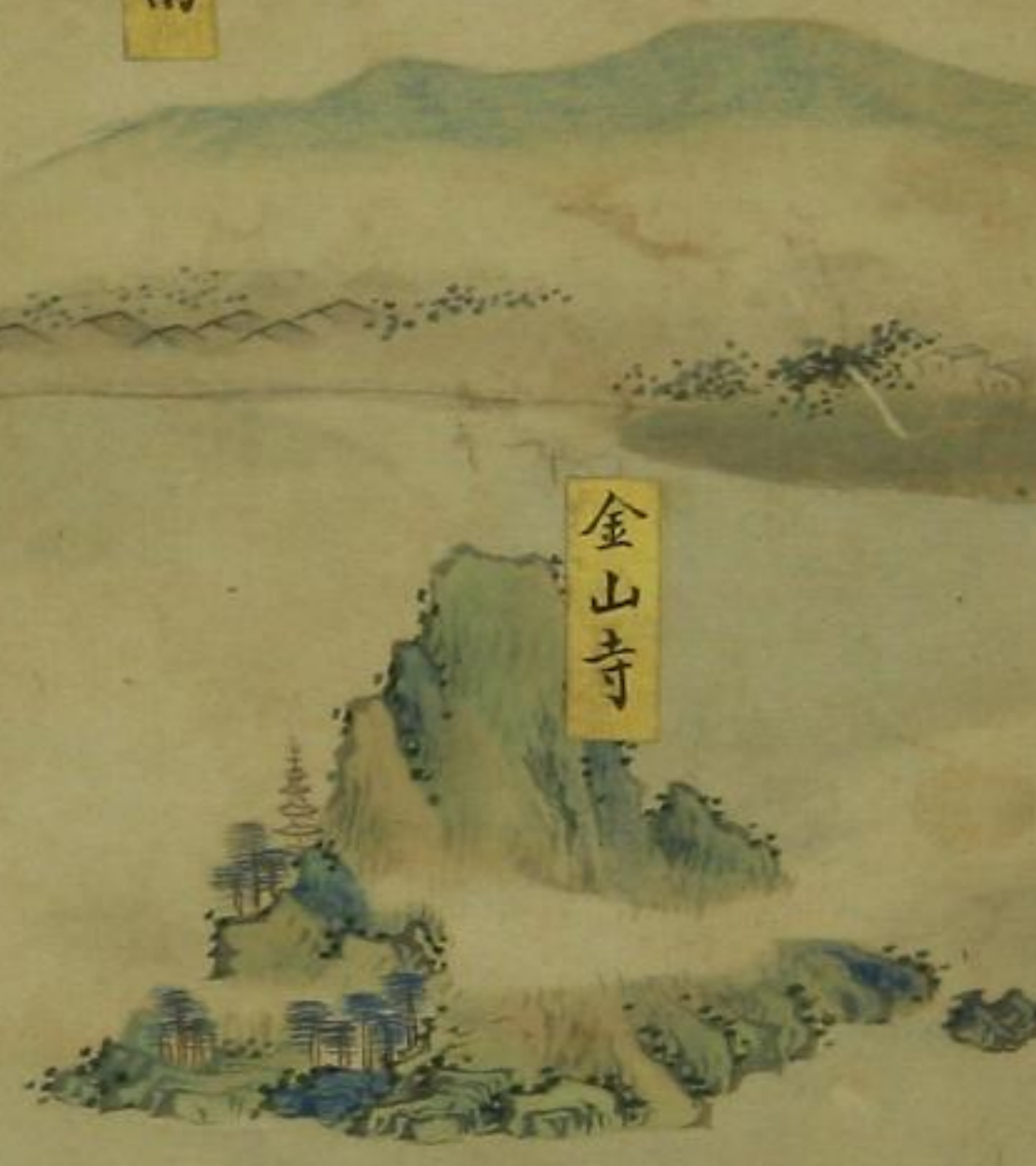
鎮江府

金山寺

此邊見江豚多躍

送船四艘

農家



金山寺遠视图



○十月十三日 晴天

五河介舟船瓜驛亭より西へ舟問曰此地何名又去

常州幾許後人寫曰本常州九十里此地無錫縣城也及舟至て人教之及

更願書曰此去到蘇州八拾里 鎮江より此地より西へ 舟て船瓜驛亭て七河介

小一村の賑くあり又舟より舟問船をてむるは異松のあり富家乃哀と

舟て長く二丁泊りて墨如くく無遠間舟泊りて蝶と西あり板舟三

あり又大なる松二本ありて灼ふの鳥多し極む 板舟の船 舟より舟人云と難

きて限あり廣野瓜屋と西風と走きて舟入此城の関あり舟より舟

あり川中小左あり三間舟築地瓜あり舟橋と掛あり一方より蝶とて

是瓜驛の左の方より大焼灯瓜掛あり舟人関中に物あり極むる橋あり





長二丁詩

きて限る、廣野孤屋、西風、走きて、入此、城、の、関、を、乃、へ、あ、り、  
 到、く、川、中、小、左、た、り、三、間、游、築、地、瓜、を、舟、橋、と、掛、ち、一、方、り、鑿、と、し、  
 是、瓜、鑿、を、左、の、方、り、大、桃、灯、五、瓜、掛、ち、り、右、人、関、中、に、勅、を、極、ち、橋、乃、  
 長、五、間、幅、二、間、路、と、乃、右、役、人、彼、の、関、守、小、し、き、跪、て、言、上、を、彭、留、役、人、二、  
 人、と、し、て、船、内、瓜、改、め、鑿、と、し、た、り、舟、橋、一、方、り、流、し、あ、る、舟、瓜、を、四、  
 二、瓜、と、して、村、鑿、と、し、鑿、と、し、い、き、小、敷、十、艘、乃、橋、船、向、り、い、き、  
 あり、て、我、船、く、突、南、を、り、我、楫、主、三、人、大、女、瓜、瓜、主、あ、り、七、八、人、三、合、争、論、  
 あり、し、小、り、松、人、教、り、二、人、出、て、交、ち、り、彼、の、唐、人、杖、を、瓜、爲、く、振、り、  
 可、何、を、如、此、関、而、り、五、六、丁、瓜、を、死、石、垣、極、り、て、



官檢船往來

浮梁

堤より多く西に里許あり又西より目鏡橋柳里湖月夜ありて風景  
 甚好し白狐沢りて何處舟を渡りやと尋く唐人書曰是蕪州之兵  
 吏為関守商船中有武器者捕之劫賊船といひしは海防とすなり又河内  
 にも館多あり由り又河内は死體の流るる事其教証ありと

甚好く自船泊りて何處舟を改めやと尋ねて唐人書曰是蕪州之兵  
 吏為関守商船中有武器者捕之賊船といひし海泊とありしは河内  
 にも船多あり由り又河内は死體の流るる事其教証あり



行程凡半里

月下過此處

○十月十四日 陰天 未明 城郭見ゆ 寫曰那城郭是何地乎 倭人蕪城と  
 寫す 廻り十三里あり 日本日本の 此川三方 介して左より人家十丁  
 許 續き 又西東の首より山ありて 樓閣建る 嶽乃中 介る 塔あり  
 河の唐人書曰是寒山寺 寔に絶勝の地ありと云ふ 蕪州の城下あり

寫り廻り十三里あり日本此川三方へ分れて左より人家十丁

里教也

許續きぬ又西東の市より山ありて橋閣建る嶽乃中今嶺の

川幅二十間許ありて家ハ川舟舟を掛る石橋三匹造あり大なる

夫板の石門ありて家ハ船を繋る道ハ石壇あり陸より登りて

一人篋瓜其にて火瓜焼くきり餅瓜賣る者あり之より一碗を買ふ

寒晒の勝入きる白砂糖下地あり價瓜向ふ六錢こは我邦より

入りて同帰國の物性も皆来りて瓜瓜買物又次舟より物人あり

門より罪人餘多ありり又村中一里許ありり一宇の禪林あり

石壁ありて尾家あり布石五間ありり其傍母十三重の塔あり山門の

額ハ金地丹墨りて瑞光寺と書く極ハ那白朱塗なり其色より又布石瓜

縁色の佛像餘多あり下ハ奇麗なる石垣ハ僧坊瓜左に掛く其間ハ楊

柳瓜植も又綿瓜小蘭乃鉢植を並金魚を飼立ぬ其後ハ三四間曉く

橋下とて通りて四疊半許の坐あり正面ハ机ありて一佛供を置く

孤月照禪心と寫る額あり橋上ハ亭ハ法堂五六人ありて讀書と夫

倉事とてりハ水理の次第ハ中ハ大井ハ豚肉瓜煮大餅こハ羊肉鶏

肉卵瓜用也小皿五是ハ漬物なり朝ハ粥りて飯ハ一日ハ二度あり友及

四人下役二人あり何名姫勢何ハ滞りをり志りるり友人我と問曰

你是何名姫ハ何名と書るりハ所り候ておきり○十月十五日晴天瑞光

寺の近道ハ綿瓜織屋ありりハ物り織りのりハ我邦りハ等り續りハ

都り女子ありて織りハ皆男子ありりハ何分り年四拾許なる人ありて

學師のり墨路二枚瓜膠り二階ハ別て見り小書籍瓜山の如く積りハ

者ありの中り初白菴詩評三本左傳り部り贈りて劍り礼服瓜りせりと

手紙り瓜脇り上下瓜りせりハ俗服りて見りとり手紙りとりと

差りてり皆好りハ學師此品瓜借りてりハりておきりハ衣入

付令り人り菓子一包りハ七添りて贈り返りとり○十月十六日晴天年五丁許の友人

七八人瓜り帽子り水晶瓜りハりハ孺子の衣裳乃胸ハ仙鶴の龜入

き瓜りハりハ書曰り○搬起米六十四包有實米多少晴天元来日本之包

有三斗晴天○已港原船長約幾丈晴天二十尋三尺晴天○濶約幾丈晴天七尋晴天○米每斗

價多少晴天日本每斗七百元晴天○鉄猫一口八百斤價多少晴天六十千文日本の六拾

片此書瓜職の内ハ収りてり○十月十七日雨天友人ありて我瓜橋りハりと

多りて瓜ハ官人椅子ハ侍りて菓文の字紙りとりとりて我ハ寫りと

（と瓜ハ依り寫曰品物現在海門伏乞就近變價將銀給求送早送回國

友人書曰請問各位名号二十六人の名瓜書りハりの字紙二枚を職のりと

森山貞次郎

友人書曰請問各位名市二十六人の名紙書りたるの字紙二枚と襪のしりし  
収てき此友人の海門大老爺とほふきしりし○十月十八日 雨天 近所の豪家へ

収人とほふきしりし奇麗なる一間のぼり入る茶紙出づ慢頭をとりなすり  
頼む一人孤崎の硯とすり 寄主寫曰琉球人常在福建每歲來此地可多要辨  
絲綿你知否 答曰我不知琉球人又曰你幾度過此地 答曰日本人過此地

有乎又曰日本人無過 答曰何故過又曰你是本來琉球人何故度包琉球乎  
答曰我無度無包實不知琉球又曰列國睦而為產物通商者你好大清亦好  
請再來此地宜得寶物乎人集りてせ話るはよき事 歸りぬ ○十月十

九日 雨天 六十路の人をりて手紙してし私我日をへ海の事 三度薩摩の坊  
屋久島迄もりて能通をせりと 上様の清名と十字字の清紋所をりて  
尺と短又唐人皆琉球日本人とほひてたふぬへり ○十月五日 雨天 年三十路の夫

来りて我小敬信録を冊紙勝りたる相謝して収む友人の藥店の主人より由  
り又紙と出して藥種の價紙をくく 實人參 本人參 三拾六貫文  
在り肉桂を五拾貫文より 龍腦を三貫文より 拾五貫文のより 實龍腦を

琉球日ちへい不波總の片腦を二貫文より さらさら系一斤四貫文より 蕪本三  
斤一貫文より 氷砂糖一斤一拾六文より 氷砂糖一斤一拾六文位より 黒砂糖一  
斤一貫文より 總の穀砂糖を四斤一貫文より 丁子一斤貳貫五文又三貫文

より 甘草式斤一貫文より 桂皮も上々同 粉朱一斤一四五文より 一貫文  
四五文より 櫻砂一斤一四文より 四五文より 鼈甲一八貫文より 拾五貫文の  
いより 玳瑁の蠻國の產物より 定より 虫散より 砂糖類は福建臺灣より

あり 木綿布鞋子價四百五十 ○木綿布襪價三百六十 ○紬鞋子價八百四十  
○木綿布每尺廿四文 ○綿紬每尺一百文 ○紬襪價八百五十 ○木綿布夷  
褲價乙千 ○紅緯帽子價乙千一百 ○木綿布袂價乙千二百 女着 ○木綿布

帽價五十六 ○木綿外套價乙千八百 女着 ○緞子小帽價二百十 ○紅絲綢  
裙價六千 女着 ○木綿布短衫價四百廿 ○紅綢紗裙價十千五百 女着 ○木  
綿布褲子三百六十 ○木綿布裙價五百六十 女着 ○木綿布長衫六百五十

○西紗長衫價四千文 ○見紬長衫乙千八百 ○夏布帳子價乙千八百 ○見  
紬夷襪價二千四百 ○夏布短衫價四百八十 ○木綿布馬卦價乙千二百 ○  
木綿布馬甲價七百文 ○絲綢馬卦價四千八百 ○木綿布外套價貳千貳百

○緞子馬卦價四千六百 ○木綿布小皮馬卦價五千六百 ○小泥馬卦價八  
千 ○絲綢小皮馬卦價十千 ○羽毛馬卦價貳千四百 ○綢紗小皮襪價貳十  
四千 ○鵝登紬馬卦價壹千八百 ○路三十六工一里每工五尺 ○我門送他

大官人請看此地衣件說明價聞此地動身五十天到家内父母妻子以可放  
心保有早に到日本國萬事放心可好可好 ○你門放心如看國法送到日本  
國還郷之日可好諸品は何色よりしを日本より七より下並あり ○十月

十日 雨天 官人三頭少官拾人より 檜下の廣間小座より 杉の俵人より 我  
主人枝取のて每人銀四兩 生銀拾八兩 行の紙具より 又おのり貞次郎より 一萬六拾

國還御之日可好法品之何色と日本から七つ下並り ○十月  
 廿一日 陰天 官人之頭山拾人未下橋下の唐間小座セリ形も何人ありて我  
 船人救瓜河のて毎人銀四両 生銀計拾八両 け瓜無ふ又あつて貞次郎へ一両六拾  
 二両とふ小是右長船の破船一舟物、擲るゝつて彼を不使と銀子瓜と  
 度むりゝも先例ありふり唯小共かあつて幸小いりあけきり鉄描并  
 濡米ありゝあつて其價小名け多く給まらりといひく又書曰銀日本多  
 有欲求器物使街吏得 答 曰為交易而歸國可處刑戮是日本之大禁也と總  
 人救銀瓜收てお謝セり貞次郎へ一両の銀包又難夷森山貞次郎即變價給  
 銀一百六十二兩と寫セり ○十月廿二日 晴天 本人あり書曰發此地送吳江  
 縣水路三十六里 日本里數 と倉事とるはりの早も何人十人許ありて于五  
 市中五丁許瓜過く大なる川筋はつて橋船五艘瓜備へ人救瓜とつて  
 高りゝも又油りしてあつた餅瓜一重本人より勝りふ何分船とあつた  
 大河西へ送り大なる目鏡橋より總馬目の三とありて三所穴の  
 橋より一丁許長二丁許高さ五丈餘幅之間もあつて一書曰此橋何名及  
 人差して是楓橋と書と又其先小目鏡橋の處ありて東西ハ都る廣野  
 ありとるんまハ救る處の馬番居く牧と身へあつて七何分吳江縣へ入て大なる  
 橋渡り船を繋ぬ船何人三人ありて人救瓜河引渡り蕪州の本人ハ  
 船ありて書瓜讀居りて我船とて厚礼とてとを挿して一禮瓜  
 してあつた瓜とつて吳江の何人たつて紙類をたまりて勝りとる早も衣入  
 何分船とつてぬ



寒山寺

姑蘇城





楓橋

姑蘇城胥門





○十月廿三日 陰天 五朝子平望縣といふ所より行程五十里 日本里數 といふ

城郭ふよのいふと影白左及五人有りて人数改め役人構至と噂いへく  
 船賃改め煙草紙類おまてて人数から兵小警付して舟出せし村  
 内百里許派を引く大なる石橋と船多ありし船乃往來尋派ありせり  
 又村と懸て田地を過き賀符といふ所の一村舟出せし岸陸ありしと  
 一新の茶坊ありし唐人の奥座ありし招きありし到りて忍びく焼酎を  
 飲もろく泡盛も等し夫より十六許の婦人構ありしを多引して何人と  
 向ひて唐人笑て焼酎を捧ぐは多引は妓女と書し頭巾は紫色の子日紅  
 振る花と等し朽葉綸子の衣派あり裾いおの袖をきき履多る鞋派  
 といふに姫さうまといふ夫また茶と菓子を出し彼の女は側ありて  
 色々と戯けしをらけり相影甲冑派ありし或は鉄炮をおり  
 武器派接し数拾人通しありし驚れ何事やらんときく軍術  
 訓練の稽古あり一月二度極小いて大國の國志ありしを  
 善ふと何分し舟出せし俄く西風強く吹きて霧派飛し河西水驛と  
 といふ所へ船出せし終末風雨烈しく棹の吹く浪勢甚し船を出  
 洲花より大河四方に連なる所派東の方へ向く走ゆく○十月廿四日 陰天 六  
 十里の水路石門縣といふ所へけしに此城ありしは彼南ありしと見え奇  
 麗ありし

賀府



賀府



富家裏口



○十月十五日 陰天

空湿縣といぬ小村派ることあり、三丈路の石橋、一あり大河東

西南三方より西岸く河中十河路派隔て家を作り下は皆丸柱ありて

一丈路ありて西面の柱は朱をりて塗り、都る尾背ありてのまゝ路多の武器派

備へありたり此下派揃へて一人出く、此派昔は役人日本人と列國より

言く、是ももるより、北の方大なる石橋ありて海上より往來する所の大船小船

数艘警備あり、東の方大河派も、車五六丁石燈あり、此のいもりて船よりめ

ぬ此のいもり、賑々ぬ人路派、尋ことて博奕をり、此のいもり、賣卜者ありて或

撮けりていもり、の取盡記するとい、いもり、と夫より七八丁まで、堀

の極まる所、あり小船三艘ありて、是より舟より、む水浅く洲ありて、金竹

乃林あり、此の派五丁派より左大橋派、大木の生茂あり、石坂あり、此の

此坂を三丁派あり、又大河四方より、是より、流舟集集せり、相三艘の船、陸より、

あせけり、本陰より、湯麵類を賣ふものあり、故より、皆立より、是派命より、役人

ありて、是の派、拂いより、是より、船より、東の方小川、筋あり、家の内

惣市中



此坂を三丁沿わたり又大河を方へ延り流舟舟集せり相三艘の船に陸ちり  
あせけりの本陰へ湯麴類を賣ふものあり故に皆立ちり是乃命す人  
ありて立ちりのみ孤柿いふるより船のり東乃方小川筋より家の内へ  
船より西六丁まで船

